

ウェールズ文化の保存に尽くして

— スァノーヴェル夫人（1802-96）の生涯 —

中野節子

94年にわたる長い人生の大半をウェールズで過ごし、この地の言語と文化の保存のために奔走しつづけたイングランドの貴婦人がいる。英国議会の建物の一部となって威容を誇る時計塔「ビッグ・ベン」にその名をとどめる政治家ベンジャミン・ホール（後のスァノーヴェル男爵）と結婚し、スァノーヴェル・コートという広大な館を構えて、最高の上流階級の人々との社交を繰り広げ、ウェールズの料理、舞踊、歌謡、衣装の保存と普及に尽力し、ウェールズ語の保存を図るためにウェールズ語で教育を行なう学校や、民族音楽の代表的楽器であるハープを教える音楽学校を設立し、年一回の民族の祭典として今でも行なわれているエイステツズヴォドの支援と維持に貢献した女性である。彼女の精力的な活動なしには、今日のウェールズ民俗文化はなかったとも考えられる。レディ・スァノーヴェル、オーガスタ・ワディントン・ホール（Lady Llanover, Augusta Waddington Hall, 1802-92）である。

I その生涯

オーガスタは1802年5月21日、スァノーヴェルのティー・イハッフ（Tŷ Uchaf）（ウェールズ語で「高いところにある家」の意）のワディングトン家（the Waddingtons）に生まれた。父ベンジャミンは、ノッティンガムシャー出身の実業家であった。ロンドンとアメリカでの事業の成功によって財をなし、10年前（1792年）に、ここスァノーヴェルに領地を買い求め、田舎紳士としての生活を始めた。このウスク河岸の景勝の地で、少女は2人の姉妹たちと幸せな少女時代を過ごしている。母は、プランタジネット王朝のエドワード一世に連なる先祖を持つ貴族の出身であった。少女は幼い時分から王家の娘たちと親しく交わり、シャーロット王妃（Queen Charlotte）とも面識を持ち、さまざまな宮廷式行儀や作法を身につけてゆく。

オーガスタは母親の血統からケルト人の血を引き継いでいて、強力なケルト文化への共感を得たと思われる。その血縁には征服王ウィリアム（William the Conqueror, 1027-87）の随員の一人としてやってきて、グラモーガンにニース・アビイ（Neath Abby）を建設したりリチャード・グランヴィル卿（Sir Richard Granville）があった。姉の一人は、後にドイツ大使としてブリテンに赴任してきたブンゼン男爵（Baron Bunsen）と結婚し、彼の周りにはケルト文化一般に興味を抱く人々の輪があった。しかしながらオーガスタの並外れたウェールズへの傾倒というのは、母方の祖父で、アングルシーに長く住み着いていたジョン・ポート（John Port）からきていると言われている。

少女は1823年、21歳で同い年の若者ベンジャミン・ホール（Benjamin Hall, 1802-67）と結婚する。長身のベンジャミン、小柄なオーガスタという外見上の違いはあったものの、2人は自分たちが治める地域の住人の安寧と幸せのために尽くすという、強い責任感で結ばれていた。数々の地

に屋敷を持った後に、最終的にスファノーヴェル・パークの領地に帰ってきた夫妻は、ここに壮大な館を建設する。1828年の建築開始以来、約10年の歳月を費やして完成されたこの館は、後に数々の大きな建築物をウェールズの地に残したトーマス・ホッパー（Thomas Hopper）の手になるものであった。彼らは自らの邸宅に多くの客人を招待し、にぎやかな社交を繰り広げる。中でも画期的なのは、オーガスタの屋敷の管理の仕方であった。召使たちをそれぞれウェールズ式肩書きをつけて呼び、伝統的な衣装をまとわせ、お互いの間の会話をすべてウェールズ語で行わせて、屋敷にはお雇いのハーブ奏者と詩人を住まわせるという、あたかも中世ウェールズの館そのものを髣髴とさせる徹底振りであった。

1859年1月、このスファノーヴェル・コートを訪問した従兄弟のホーレス・ワディントン（Horace Waddington）は、館での夫妻の暮らしぶりを生き生きと記憶している。それによると、館では午後の2時に早めの正餐が、また夜8時にはハイ・ティーが供されること、古風な白いドレスを着た女中たちが給仕をし、夫人は召使たちと終始ウェールズ語で話をしていること、日曜日にはスファノーヴェル卿と自分は、小さな教会で行われる英語の礼拝に出席したが、夫人の方は午後行われたウェールズ語の礼拝に出席していること、夫人は尖ったシルク・ハットを被り、毛皮の縁どりがついた真紅のマントと幾分短めのスカートという、生粋のウェールズ風衣装を身につけていたと言う。

夫人のこのようなウェールズ文化への傾倒は、幼い頃から近隣の人々の小屋を訪問してはウェールズ語で会話を交わし、ウェールズの文学を熱心に学んでいた経験からきていると思われる。1834年、カーディフで開催されたエイステツヴォドでは、自らも「グエニネン・グウェント」（‘Gwenynen Gwent’）（「グウェントの蜜蜂」）という吟唱詩人名で、ウェールズの言語について英語の論文を書き、賞を取ってもある。夫妻はその後アベルゲイヴニーの民族の祭典（1834-51）を援助し、開催のための資金を提供したり、賞の授与等を行なって、その継続に貢献している。

1847年の、あの悪名高いウェールズ教育青書「ブルー・ブック」（Blue Books）は、ウェールズ人の庶民たちが「不潔で、怠惰、無知で、迷信深く、信頼できない。でたらめで、不道徳である」と決めつけた。そしてまた、彼らの文化や道徳の低いのは、自国語ウェールズ語への如何ともし難い執着と非国教主義からきていると報告している。たしかに、当時はウェールズ地方への庶民教育の浸透は低く、母国語のウェールズ語でさえ、書いたり、読んだりすることができない女性の数は多かった。1844年、10の登録所に登記された3,224件の結婚で、結婚登録書に自分の名前を書くことができた花嫁の割合はたったの29%であったという記録も残っている。このような識字率の低さを改善し、国づくりの上で、大いに力となるような家庭婦人たちの育成という目的をもって、イヴァン・ジョーンズ（Evan Jones）（‘Ieuan Gwynedd’）というバプテテスト教会の牧師が、ウェールズ婦人のための定期雑誌の刊行を計画する。その際、資金面での支援をしたのも他ならぬこのスファノーヴェル夫人であった。こうして、1850年に、ウェールズの最初の婦人雑誌「イ・カムラエス」（‘Y Gymraes’）（「ウェールズ婦人」という意味）が創刊されている。

夫妻はまた、ウェールズ独特の文化の保存のために力を合わせる¹⁾。中でも英語の浸透のもとで、しだいに衰退してゆくウェールズ語への並々ならぬ関心は注目に値する。自分たちの所領に新設した学校に、わざわざ北ウェールズのベテシダから、ウェールズ語話者の校長を招いて、ウェールズ語による教育をさせたりしているのである。夫人が1847年に創立したスランドヴェリー・カレッジ（Llandoverly College）は、当時ウェールズに二つあったパブリック・スクールの一つであったし、ランピターのセント・デイヴィッド・カレッジ（St David’s College）の存続が危ぶまれたようなときには、援助するのに吝かではなかった。ベンジャミンが、ウェールズの人々は当然のこ

ととして自国語であるウェールズ語で礼拝を行なう権利を持っている、したがって新しいウェールズの主教はウェールズ語話者であるべきであり、ウェールズに居住しなければならない。またそれまで馴合いで決められていた教会の歳入の改革をすすめること等を主張して、国教会の主教たちと激しい論争を繰り広げたこともよく知られた事実である。厳しい禁酒主義者であったスノーヴェル夫人は、所領内にあった7つのパブを買い取って、それぞれウェールズ名を与えたティー・ハウスに改造したりもしている。

夫ベンジャミンは、ロンドンのメルルボーン選出の国会議員として活躍し、チャーティストの蜂起、穀物法や貧民法の改定で揺れ動く政治の世界で働き、国会議事堂に取り付けられた時計塔「ビッグ・ベン」(‘Big Ben’) にその名を残し、1838年に、スノーヴェル男爵の爵位を受けた後は、モンマスシャーの上院(貴族院)議員となっている。しかしながら1867年、44年間にわたる結婚生活の末、銃の暴発の事故が原因で亡くなってしまうのである。流血のメルシール反乱(Rising Merthyr)の原因を作ったと目される現物給与支給の制度を廃止する「トラック廃止法」(Truck Act)の成立(1831)に尽力し、ウェールズ語で教育をおこなう学校の設定等、ウェールズの人々の生活改善のために奮闘した、かけがえのない同志としての夫の突然の死であった。オーガスタは自分の友人に、「すべてが終わりました。私の人生の光が消えてしまったのです」と書き送っている。しかし夫人は、夫の死後30年にわたって生きつづけ、ウェールズの楽器トリプル・ハーブの製造と販売、ウェールズの黒い牛や羊の飼育等の産業に力を注ぎ、「ウェールズの生きた守護聖人」(‘The Living Patron Saint of Wales’)と称される活動をつづけ、1896年1月17日に亡くなっている。

II その仕事

(1) ウェールズ民族衣装の収集

黒いシルクハット、赤い三角形ショール、格子模様のペティコートをもった人形は、今でもなお、ウェールズを旅する観光客の目をひく存在である。しかしながらこのような代たちが、はたしてウェールズ本来の庶民のものであったかどうかということについては、大いに異論があるところである。多分これは後期スチュアート朝(1603~1714)の装いであり、それがウェールズの辺境の地に長く残り、19世紀の観光ブームに乗ってウェールズの地を訪れたイギリスの観光客の目をひき、ウェールズの民族衣装として定着したと思われるからである。夫人の関心は主に女性たちの服装にあったため、残念ながら男性の服装については皆目分らないままである。

スノーヴェル夫人は1836年に、型紙から自ら写し取った、ウェールズ民族衣装の一連のスケッチを出版している。キルヴァート(Francis Kilvert, 1840-79)は、1871年、スワンゴックでシルクハットを被った婦人を見たとき記述しており、同年、セント・デイビッドでは「ほとんどの男性は青い上着を、婦人たちは長い青い外套をまとっていた」と述べている。また、1949年に84歳で亡くなった男性は、自分の母親とその友人たちが、カーディガンシャーの市場にウェールズの衣装を着て出かけていったのを憶えていると供述している。

(2) ウェールズ舞踊と民俗音楽の収集

スノーヴェル・コートには、1844年から88年までの長きにわたって仕えた、お抱えハーブ奏者トーマス・グリフィッツ(Thomas Gruffydd)がいた。彼が亡くなるまで、屋敷の宴会ではウェールズの4拍子のリールという舞踊が、2人の女性と1人の男性の召使によって、客人の前で披露さ

れていたと言う。1931年、モンマスシャーのフォークダンス・ソサイエティー支部の会員が、アルバート・ホールで開催された全英大会で、「スァノーヴェル・ウェルシュ・リール」(Llanofor Welsh Reel)を踊り、「典型的なウェールズのリール」であるという評判をとっている。

マリア・ジェーン・ウィリアムズ (Maria Jane Williams, 1795-1873) の『グェントとモルガヌク地方の国民的な古き歌謡』(*Ancient National Airs of Gwent and Morganwg*) が、1844年に出版される。原典の序文によると、この歌曲集は、ニースの溪谷を中心に農家の人々によって当時歌われていた民謡をあつめたものであると言う。そこはウェールズ地方でも最高に情緒のある、静かに保たれた地として知られているところである。そしてこの民謡はメソジスト改革運動 (Methodist Revival) の後で急速になりを潜めてしまった。再版された1988年版の序文には、この書物が20世紀に入る前に出版された、言葉と曲とを掲載した、唯一のウェールズ民謡集の最初の文献であると説明されている。その出版にあたっては、スァノーヴェル夫人の励ましと説得、夫人の友人の学者を動員しての言葉の修正作業があり、それゆえにこそ実現した仕事であった。そのほかにも、「イオロ・モルガヌグ」(‘Iolo Morganwg’), (Edward Williams, 1747-1826) の文献を含む、スァノーヴェル夫妻が長年にわたって自ら買い求めたり、収集したりした膨大な文献は、夫妻の孫息子の手によって、1916年に一括して、ウェールズ国立図書館に寄贈されている。

940年から950年頃に成文化されたと思われる「ヘウェル・ザー」(‘Hywel Dda’), (Hywel ap Cadell, c. 890-950) の法律によると、それぞれ館の主人は、「ペンケルズ」(‘pencerdd’) と呼ばれる楽師長を雇い、ウェールズ音楽で独特な位置をしめる三つの楽器、横笛の一種ピブゴルン (pipgorn) とケルトのヴァイオリンの一種クルウス (crwth) とハープ (deryn) を買い与えることを定めている。その中でもハープの占める地位は特別に高かった。12世紀から13世紀にかけて生きたギラルダス・カンブレシス (Giraldus Cambrensis, c. 1146-1223) によると、館に到着した旅人は、待機する乙女たちのハープの演奏でもてなされ、いかなる館においてもハープを奏でることは最高の技術であると見なされていたことが記録されている²⁾。

なかでも三弦が平行に並べられたトリプル・ハープは、中央の弦で半音の操作を行なうため、高度の演奏技術が要求され、ペタル操作のハープがオーストリアから輸入される17世紀まで、持ち運びもできる重要な楽器として、ウェールズ社会で重用されていたのである。

(3) ウェールズ料理の調理集

スァノーヴェル夫人は、1867年に、『良き調理の最初の原則』(*The First Principles of Good Cookery*) という本を出版した。この本は、ただたんなるウェールズ料理の調理法の収集としての価値だけではなく、「序」の部分にセント・ゴヴァンの隠者によって語られる不思議な話をつけて出版された特異な本である。

18世紀になると出版の隆盛に後押しされて、多くの料理関係の書物が出版されている。中でもE・ラッファルド夫人 (Elizabeth Raffald) の『熟練の英国式家政法』(*Experienced English Housekeeping*) (1769) などは、今日にいたるまでよく引き合いに出される愛読書であった。19世紀には、M・ランデル夫人 (Maria Rundell) の『個人の家庭向きの経済的原則に基づいた家庭料理の新しいシステム』(*New System of Domestic Cookery Formed Upon Principles of Economy and Adapted to Private Families*) (1806) が出版されて、若き花嫁の必携書となり、大いに売れたのを皮切りに、I・ビートン夫人 (Isabella Beeton) の『家政経営法』(*Household Management*) (1861) が一世を風靡してゆく。

しかしながら、このスァノーヴェル夫人の料理集は、明らかにそれらの本とは一風変わった雰囲気

気をもった書物であった。たしかにその中には、グウェントとモルガヌウク地方で作られている伝統的な「テイセン・ブラン」(‘Teisen Fran’), ウェルシュ・アップルとルーバークのケーキなどの具体的な作り方が含まれている。夫人独特のウェールズのリーク・スープは、鳥とセロリと24個のフレンチ・プラムで作られるといった情報も書かれているし、その他、「茹でた鳥」、「ビーフ・シチュー」、「塩鴨」などの調理法も載っている。しかし「カエルの足」等の幾つかの料理は、当時すでに完全に廃れてしまっており、19世紀のものというより、18世紀の始めごろの料理であった。しかもこのような具体的なレシピの数々は、付記(Appendix)の部分に掲載されており、冒頭に登場してくる隠者と旅人の紳士のエピソードや、台所で使われる調理器具の説明、はたまた料理の素材として提供される食材としての、家畜の理想的な飼育法等への言及も含まれている。すなわち総合的な料理本という特徴をもっているだけでなく、おそらく大農家の簡単な副業的牧畜の指南書であったことが分かる。それにこの本は、実際にスノーヴェル・コートという広大な屋敷の管理の全てを取り仕切り、大勢の客人を日常的にしばしば接待して自らも台所に立ち、料理人たちを監督して働いた夫人の生活から生まれた本なのである。実際的な台所管理法と共に、上流階級の家庭(大勢の使用人を含む)の運営の仕方を説く、文化史的な意味をも含む書物でもある。まさにスノーヴェル家の台所の入り口に掲げられていたというモットー：

‘Da i bawb cyhideb yw

A thad i gyfoeth ydyw’

(「残りもののかけらは恵みをもたらし、富の父親である」)

に著されている如く、上流階級の大きな所帯を切り盛りするための、館の夫人たちの心得を述べた覚書集の様相を留める著作となっている。掲載されたすべての事象は、スノーヴェル夫人自らが実践し、確かめたことであり、他人の本からの写しや剽窃の部分は皆無である。当時夫人は、不慮の事故にあった愛する夫ベンジャミンを献身的に介護する生活を送っており、校閲の時間もままならないという環境の中にあった。そんな中で、料理の味わいという重要な問題と共に、いかに経済的に、栄養と健康的を維持する料理を家族の面々に提供するかという、彼女の関心のありようが明確に示されている。ここには、彼女の伝統を重んじつつ創造をめざすという二つの面が明確に表れている。

この料理の本は、1991年、南ウェールズで、ウェールズ料理専門のレストランを営む料理研究家B・フリーマン(Bobby Freeman)女史によって、スノーヴェル夫人の仕事に対する詳細な評価をつけた「序文」付きで再版され、その重要性が再評価されている。その中でフリーマン女史は、100年のときの隔たりがあるにもかかわらず、このスノーヴェル夫人が、料理に「専門的技術」を認めた最初の婦人であったことに特別な親近感を抱くと述べ、夫人こそは料理に対して自分と同じような喜びを感じていたのみならず、同時にまた大きな戸惑いをも感じた同類者であり、料理というものに革新的な見解を持った先駆者であると言っている。女史はまた、夫人の署名入りの原書を図書館で手にとったときに感じた幸せな思いと、スノーヴェル家の霊廟を訪れたときの感慨を、今にも台所を小走りで走る夫人の足音が聞こえてくるような思いがたとえ生きて綴っている³⁾。

生家「ティー・イハッフ」に掲げられた肖像画の中の夫人は、丈の高い「ウェールッシュ・ハット」を被り、熱心に保存を図ろうと努力したウェールズの民族衣装をまとい、料理の本の中でも高く評価していた、料理用の薬草クリウネイの花束とヤドリギの小枝を手に行っている。これらの薬

草は、癲癇や神経症の治療薬として、当時盛んに使われていた素材であった。

このようなスノーヴェル夫人の活動の原点には一冊の本があった。これは彼女が最初に手がけ、出版にこぎつけた書物である。その後の夫人の活動を見るとき、この一冊の書物の重さがあらためて思いおこされる。

(4) 『メアリー・グランヴィル、デラニー夫人の書簡と自伝』(*The Autobiography and Correspondence of Mary Granville, Mrs. Delaney*) (1861) の編集と出版

スノーヴェル夫人の母親であったジョージアナは、グランヴィル家のメアリーのところで、従妹たちとともに養育された経験をもつ婦人であった。グランヴィル家のメアリーは、後にジョージ三世とシャーロット王妃の宮廷で活躍し、ジョンソン博士 (Dr. Johnson, 1709-84) が「バーク (Edmond Burk, 1709~88) が言うところの、世界で最も育ちが良く、あらゆる時代の女性の手本になるというデラニー夫人」と書き残している女性である。結婚し、自らも二人の娘たちをもったジョージアナもまた、娘たちをこのよき 18 世紀の上流階級にふさわしい娘として教育している。したがってオーガスタの屋敷の管理方法や趣味は、全く古風なものであり、その暮らし方は完全に一世紀前の雰囲気をとどめるものであった。彼女が最初に編集し、出版したこの書にも、そんな彼女の価値観がよく現れている。まさに家庭というものに対してのスノーヴェル夫人の基本的な見解を形作った本なのである。

III エイステッツヴォドとウェールズ

スノーヴェル夫人が夫ベンジャミンの協力を受けながら、また夫亡き後は、独力で精力的に行なった社会的活動の中でも、ひととき大きな意味を持つ「エイステッツヴォド」(‘Eisteddfod’) というのは、ウェールズの社会の中で、どんな意味を持つ活動なのだろうか⁴⁾。

(1) そのはじめりと歴史

この語の由来は、ウェールズ語の動詞「座る」という意味の ‘eistedd’ である。元来「詩人 (バルド) (bard) のあつまり」という意味合いで使われており、その歴史は、古くは 517 年頃、イステム・スウィディアルス (Ystum Llwydiarth) の地で、大詩人タリエシン (Taliesin) によって開催された集まりまでさかのぼるといわれている。540 年のマエルグン・グウィネズ (Maelgwn Gwynedd) によって開かれた、コンウェイ川のほとりでの詩人たちの集まりもよく知られている。9 世紀、ゲライント (Geraint) によって催された「イ・バルズ・グラス」(‘Y Bardd Glas’) は画期的な意味を持つ集まりであった。ウェールズ詩の特徴的な詩型「ケンハネズ」(‘cynghanedd’) を使った作詞技法が、競技会の型として採用されることになったからである。このように、さまざまな地方での多くの趣向を凝らしたエイステッツヴォドが開かれたのちに、まとまった大きな集会になるのは 12 世紀に入ってからのものである。1176 年、リース卿 (Yr Arglwydd Rhys), (Rhys Ap Gruffydd, 1132-97) が、カーディガン城で開催したエイステッツヴォドが、政治的な面からいってもまた詩的な面からも、全国的権威をもったヨーロッパ最古の祭典であると見なされている。その後、この祭典が 19 世紀のイオロ・モルガヌグの手によって、ウェールズ文化を支える中世的雰囲気をたふんに盛り込んだ集まりとして再構築され、ウェールズ各地から、それぞれの地区予選を勝ちぬいた詩人たちが集う民族の祭典になってゆくのである。

初期のエイステッツヴォドは、職業的詩人の一団 (‘Bardic Order’) に属する詩人たちの集まり

であった。その主たる目的は、韻律の規則を取り決めたり、彼らの徒弟制度の中でしかるべき修行をおえた弟子たちに資格を認定し、急増する巡回詩人たちの数を制限することにあった。このようなエイステツヴォドの代表的な例が、1523年と1567年に、カエルウィス（Caerwys）で開かれた大会である。その大きなねらいというのは、ウェールズ各地に増えすぎた放浪楽師や、吟唱詩人と名乗る浮浪者を篩にかけ、ほんとうにその名に相応しい優秀な者だけにその生業を許可し、残りは彼らの本来の職業に戻して、従わない者は法律に照らし浮浪者として裁くということにあったのである。すなわちこのカエルウィスの大会は、優秀な大会出場者にとっては詩人や楽師として公認される機会であり、為政者当局にとっては多くの放浪楽師や詩人を「治安」を乱す輩として排除するための好機という二つの役目をもっていたと言える。ウェールズの法律書によると、中世ウェールズには三種類の詩人がいたことが知られている。そのうちのペンケルズ（pencerdd）は吟唱詩人（バルド）の長である最も高い位の詩人で、宮廷においては王の脇に独自の椅子を有する権威者であった。またバルズ・テイリ（bardd teulu）と呼ばれる次の位の詩人たちは、ある特定の家に所属したり、また宮廷の24の役人の一人となっていた。詩人たちのうちの第三番目の階級に属する者が、これといった保護者を持たず各地を放浪する詩人ケルゾル（cerddor）である。彼らは吟唱詩人たちの長であり詩歌の最高権威者でもあるペンケルズの管轄下に置かれ、その役目というのは冗談や諷刺で人々をもてなすことにあった。このように、ペンケルズは王国内でさまざまな特権を有する重要人物であったし、バルズ・テイリにはペンケルズほどの権威はないものの、主に子どもや女性の相手をする詩人たちで、さまざまな特権等を与えられて優遇されていた。一方でケルゾルと呼ばれた放浪の詩人たちの身分は大変低く、民衆の間を放浪しては唄や音楽を供する楽師であり、大道芸人の類だったことが推測される。王侯貴族の館における高位の詩人たちは、宴の席においては常に王のかたわらに座し、彼らの語る祖先たちの英雄譚や賛美の唄なしには、肝心の宴そのものも始まらないほどであったと記録されている。また身分が低いとはいえ、民衆の間で民族自立の夢を語ったり、諷刺や諧謔を用いて為政者個人や社会の誹謗を試みたりして、民衆の不満をおおる放浪の詩人たちの人気も、当時の為政者にとっては無視すべからぬものがあった。このようにその程度と質の違いはあれ、ウェールズ社会における詩人たちの重要さは、他の国々に類を見ないものである。また民衆の間を放浪する詩人たちは、慣例として集まった聴衆から「コムルサ」（‘comortha’）と呼ばれる報酬を受け取り、その一部は最終的にウェールズの上流階級の人々や有力者の懐に入る仕組みになっていた。その額はないがしろにできないほどで、それを規制するためにも、詩人や楽師の資格を認可する制度の確立が必要にもなっていたのである。このようにエイステツヴォドは詩人たちの技量を競うコンテストであると共に、詩人の資格試験のような意味合いも兼ねるようなものであった。

しかしながら、このカエルウィスの大会後、エイステツヴォドを催すウェールズの文化的基盤が急速に衰退してゆく。吟唱詩人の庇護者であったウェールズの上流階級の人々がこぞってイングランド文化に同化してゆき、自国の古来の文化にはあまり興味を示さなくなってしまったからである。そんな風潮の中、16世紀末にはエイステツヴォド自体も下火となり、17世紀末には職業的な吟遊詩人もすっかり姿を消してしまった。

(2) アマチュアのエイステツヴォド

一方で、アマチュアの詩人たちが、居酒屋などに集まって、この種の活動を続けていた。その中に、暦の出版者で文学者でもあったジョン・ロデリック（John Roderick, 1673-1735）の姿がある。彼は自分の出版する暦の中に、居酒屋で行なわれるエイステツヴォドの開催日を記載し、人々

に盛んに参加を呼びかけた。北ウェールズで行なわれたこれらの「アルマナック・エイステツズヴォド」は、18世紀初頭から断続的に行なわれていたが、ウェールズの知識人からは冷ややかな目で見られている。彼はまた、居酒屋で行なわれる「エイステツズヴォド」に出場する素人詩人たちのために、ウェールズ詩における24の詩形を解説する手引書として、『ウェールズ語文法』(Grammadeg Cymraeg, 1728)を書いている。その詩形というのはエングレン (englyn) 8種類、カウィッツ (cywydd) 4種類、アウドゥル (awdl) 12種類であった。

(3) 近代エイステツズヴォドの始まり

近代のエイステツズヴォドは、フランス革命の1789年に、北ウェールズの収税人トマス・ジョーンズが、衰退の一途をたどっていたウェールズ文化を活性化するための一助として、これら北ウェールズの酒場で細々と開かれていたエイステツズヴォドの後援を、ロンドンの富裕なウェールズ人会グィネツズィギオン (Gwyneddigion) に依頼したことに始まる。そんな人々の中に、グィネツズィギオンの書記を務めるウェールズ語学者でありもあり、詩人でもあったウィリアム・オーウェン・ピュー (William Owen Pugh, 1759-1835) がいた。彼が起案した運営骨子には、大会は一年と一日前にその開催を予告すること、同時に参加作品用の主題を発表すること、詩には本名ではなくペンネームとして吟唱詩人名を記載すること等の諸規則が含まれており、それが現在まで踏襲されることになる。しかし皮肉なことに、このエイステツズヴォドは、思わぬ副産物ももたらすことになってしまった。ウェールズにだけ残っていた、中世からの伝統的な民衆劇の息の根を止めてしまうという結果になったからである。名声と高額な賞金が手に入るこのエイステツズヴォドでの優勝を目指して、人々の関心が演劇から詩へと移って行ってしまったのである。グィネツズィギオン主催のこのエイステツズヴォドは約10年続いた。

(4) 地域エイステツズヴォド

ナポレオン戦争の動乱が収まる1815年、ウェールズ人の国教会聖職者たちが、ダヴェッド、グィネツズ、ポイス、グウェント・モルガヌウグの4地域に、エイステツズヴォドを開催するための地方協会を設立し、1819年に、この地方団体がはじめて主催するエイステツズヴォドが、カマーザンで開かれた。この地域エイステツズヴォドは、1838年のカーディフ大会まで、合計10回開催される「カンブリア・オリムピック」として知られるエイステツズヴォドで、セント・デイヴィッド主教トマス・パージェスが積極的に支援し、また1820年にロンドンで再結成されたウェールズ人の愛好団体カムロドリオン (Cymmrodorion) もこれを後援した。この地域団体主催のエイステツズヴォドで、イオロ・モルガヌウグによって考案された「ゴルセツズ」('Gorsedd') の儀式が取り入れられた。かつて1792年に、イオロはロンドンに住むウェールズ人の詩人たちをプリムローズ・ヒルに集め、石を環状に並べ、その中に祭壇をしつらえ、その祭壇に刀を置き、詩人たちが見守る中で、彼がそれを鞘に収める儀式を行い、これをドルイドの儀式として儀式化を計った。こうしてイオロによりドルイドとバルズが、またこのカマーザン大会でドルイドとエイステツズヴォドとが、一つに結び付けられたのである。またこのカマーザンのエイステツズヴォドから、詩に対して音楽が優勢になっていった。これらの地域エイステツズヴォドでは、伝統的で厳密な詩形に基づく長詩アウドゥルよりも、自由韻律詩プリゼスト (pryddest) が盛んになった。こうして1867年のカマーザン大会からは、プリゼストはアウドゥルと対等の地位を与えられることになり、アウドゥルの勝者には今までどおりの木製の椅子が刻まれたメダルが、またプリゼストの勝者には新たに王冠が与えられるようになったのである。

(5) アベルゲイヴニー・エイステッツヴォド

1834年のカーディフ大会で、地域団体主催のエイステッツヴォドはその幕を閉じ、その後、1851年までカムライギズィオン・ア・ヴェンニ（Cymreigyddion Y Fenni）の主催によって、モンマシャーのアベルゲイヴニー（Abergavenny）で、10回のエイステッツヴォドが開催される。このときの重要な後援者が、他ならぬオーガスタ・ホール（Augusta Hall, 1802-97）、すなわちスノーヴェル夫人であった。夫人は、ブレコンの聖職者トーマス・プライス（Thomas Price, 1787-1848）、「カルンフアナウク」（‘Carnhuanawc’）師等のウェールズの一流の文化人たちと共に、ウェールズ文化を維持するために、この祭典の後援に力を尽くした。アベルゲイヴニーでの10回のエイステッツヴォドでの夫人の活躍は、まさに目を見張るものがある。彼女は夫ベンジャミンやプライス師、そしてまたバラの聖職者であったジョン・ジョーンズ（John Jones, 1792-1852）、「テギド」（‘Tegid’）師の助けを得て、素晴らしい大会を開催している。これらの大会には、ハーブ演奏、踊り手たち、音楽家、詩人たちが参加し、ヨーロッパからはケルト学者が招かれた。コンテストの賞品も豪華で、メダルや高額の賞金が勝者に贈られている。夫人はまた地域の上流階級の人々に、この大会を支援してくれるよう熱心に説いて回った。しかし皮肉なことに、このようなウェールズ文化や言語を保存し盛んにしたいという、夫人の切なる願いにもかかわらず、実際生活上、生きて使用されるウェールズ語に対する関心というよりも、この言語が、学問的に研究に値する古いヨーロッパ言語の一つであることを人々に認識させる結果となってしまったのである。このような弊害はあったものの、スノーヴェル夫人の努力によって、ウェールズ古来の舞踏や音楽、特に弦が三列に並んだトリプル・ハーブ等の競技会などの催し物が、人々の関心を集めたということには大きな意味があった。

(6) ナショナル・エイステッツヴォド

このような地域エイステッツヴォドが終わりを告げると、何とかして全国規模のエイステッツヴォド（Yr Eisteddfodau）を開催したいという、ウェールズ人たちの希望が強くなってゆく。この気運は、1847年、ウェールズ人が進歩から取り残されているのは、彼らがあまりにも自分たちの言葉ウェールズ語に固執しているからであり、ウェールズの女性たちは性的にふしだらであるといった内容の、驚くべき無知と偏見に満ちた政府報告書（‘Blue Books’）が公表され、ウェールズ人たちを激怒させたことによって、いっそう高まることになる。1860年のデンビーでの大会において、ウェールズ文化を助成、促進し、ウェールズ語の保護を目的とするエイステッツヴォドを開催するための、全国規模の団体の結成が決定された。執行委員会が作られ、その委員は選挙で選ばれ、委員会は、毎年一回、北ウェールズと南ウェールズで、交互に大会を開くことを決定した。こうして第一回目の正式なナショナル・エイステッツヴォドが、1861年にアベルダーレで開催されるのである。しかしながら、この新しい全国規模のエイステッツヴォドにおいても、国教会と英語がますます力をもつようになり、会場では音楽の競技会が盛んに行なわれ、元来の詩人たちの活躍の舞台はずっと後退してしまう。

以上概観したように、長い歴史と紆余曲折はあったものの、現在ではこの「ナショナル・エイステッツヴォド」が、ウェールズの北と南の地方で交互に、毎年8月の始めの一週間開催され、「冠」と「椅子」を授与される詩人たちを選考する最大の式典をはじめ、ウェールズ各地から集まった人々によって、多くの競技会が開催されるウェールズ民族の文化の祭典となつてつづいている。祭典にお

いては、全会期中、会場で使用される主たる言語はウェールズ語であり、英語はあくまでも脇役の言葉となっている。

このほかに、この「ナショナル・エイステツズヴォド」に先立つ年中行事として行なわれているのが、国際的な民族音楽や舞踏のエイステツズヴォドである。これは1858年にスアンゴッセンの地で開催された4日間にわたる祭典から始まり、その後毎年夏の時期に開催され、世界各地から多くの人々の参加をみている。

IV 二人の貴婦人たち — 保守と革新の生涯を生きて

以上見てきたようなスアノーヴェル夫人の96年にわたる生涯は、ウェールズ文化の保存と維持という大きな目的に向かっての努力の日々であったと言える。夫人のイギリス、ウェールズ、ヨーロッパにわたった上流階級の人々との華やかな社交の様子は、同時代を生きたもう一人の貴婦人、シャーロット・ゲスト夫人(Lady Charlotte Guest, 1812-85)と並び称されている⁵⁾。この婦人は、イギリス貴族の娘として生まれ、ウェールズのみならず世界の鉄鋼王といわれた実業家J・J・ゲスト氏(Sir Josiah John Guest, 1785-1852)と結婚し、夫の片腕となって12,000人の労働者の福祉と管理に力を注いだ女性であった。ゲスト夫人はまた、独自の教授法を編み出した学校教育や、成人学校の設立等の改革に取り組み成果を上げたばかりではなく、『マビノギオン』(*Y Mabinogion*) (1849)の翻訳を始めとするウェールズ文化の紹介をおこなうという、まさに八面六臂の活躍をしている。これら二人の婦人の活動によって、「ウェールズ復興」('Welsh Revival') (1835-45)の口火がきられたと言ってもよい。

しかしながら、この第9代リンゼイ伯爵の娘として生まれ、英国の貴婦人としての使命感に燃えて、その長い一生をさまざまな分野で活動したシャーロット・ゲスト(後のシュライバー(Shreiber))夫人の生き方とスアノーヴェル夫人のそれとを比べてみると、そこには大きな違いがあることに気づく。まず一番大きな違いは、10歳年下のゲスト夫人の生き方には、女性としての個人的な幸せを求めて生き抜いた、きわめて現代的な面が見られるということである。家庭教師との初恋に敗れ、24歳年上の実業家の妻となったシャーロットの最初の努力は、夫ゲスト氏が上流階級の人々に受け入れられるようにするというところにあった。いわば夫の社会的な身分の確立と事業の成功のための努力であり、やがてゲスト家に誕生した10人の子どもたちの身分の確保のための活動であったのである。(長男イヴォル(Ifor)がマールバラ公爵(Duke of Marlborough)の娘コーネリア・チャーチル(Lady Cornelia Churchil)と結婚したのをはじめ、ほとんどの子どもたちはすべてイングランドの上流社会に、自分たちの地位を確保している)。しかしシャーロットの後半生は、子どもたちや周囲の人々の猛反対にもかかわらず、息子のケンブリッジ大学時代の個人教師、14歳年下のシュライバー氏との再婚と、この二番目の夫となった若きシュライバー氏の名を、歴史に永遠に留めようとでもいうべき努力、すなわち陶器・磁器の収集とヴィクトリア&アルバート博物館への寄贈の仕事にあてられている。上流社会の特徴的日用品の保存ととってもよい。シャーロットはその死の前年まで、克明な日記をつけており、この膨大な資料は、1911年には息子の手により、また1950年にはベスバラ伯爵(Earl of Besborough)によって編纂され、出版されて、当時の夫人個人の心の有りようと共に、彼女の生き抜いた社会の状態を知る上での貴重な資料を提供している。

一方、スアノーヴェル夫人の活動は、終始古風な家庭婦人としての生き方を守りながら、ウェールズという地域社会での活動を貫き、彼らの母国語ウェールズ語や、音楽・舞踊・衣装等のウェー

ルズ庶民文化の保存に捧げられていた。そこには夫ベンジャミンの急逝、ホール家の子供たちが娘ひとりを除いて夭折してしまったという家庭の事情もあった。中には、元来ウェールズ固有の風習ではないものまでも熱心に保護するといった、いささか最良の引き出し気味な仕事も見られ、ときには捏造の汚名を着せられてもいる。しかし夫人のウェールズに対する思いは常に真摯で、愛情あふれるものであった。

同じ庶民への学校教育という点からいっても、二人の女性たちのとった態度には、明確な違いが見られる。民族の伝統や文化に自信を持たせるために、徹頭徹尾、自国語ウェールズ語を使っただけの教育にこだわったオーガスタに対して、シャーロットの方は、社会での成功を達成するための英語を身につけさせるための、英語での教育を重視した。このような違いは、ひとつには、2人の女性たちの育ち方からもきている。シャーロットにとってはウェールズの地は、結婚によって彼女が運命的に出会った地にすぎず、初期に示したウェールズ語への傾倒も、もともと知的で、さまざまな言語に関心が深かった彼女が、新たな学習の言葉として選び取り、研鑽を積む対象であったのだ。それを裏付ける如く、あんなにも没頭していたウェールズ語を、実際の生活のなかで夫人が使っていた形跡はなく、『マビノギオン』完成後は、すっかり関心を寄せなくなってしまっている。ゲスト夫人はあくまでも、ウェールズの地への旅人であり、その地の文化に、イングランド人としての関心を抱いた、生粋のイングランドの貴婦人であった。一方スァノーヴェル夫人は、もともとこのウェールズの地に生まれ、日常生活の中でウェールズ語を使いながら育ち、近隣のウェールズ人と交わった、ケルとの血を色濃く引く女性であったのである。いささか古風な価値観を持っていたとはいえ、彼女の行動の中には、中世のウェールズ上流階級の貴婦人の価値観と、大叔母グランヴィル（デラニー）夫人から引き継いだ、18世紀のイングランド貴族の館の経営術がしっかりと根づいている。いわば彼女は、イングランド式教養を身につけて、ウェールズ社会に生きた女性であったのである。後に大きな社会的意味も持って表面化してくる、「訪問する」ウェールズと「暮らす」ウェールズの違いを、この二人の夫人の生き様からも垣間見る思いがする。

この稀有ともいふべき二人の婦人たちの姿には、ウェールズの女性たちの社会的地位の高さを髣髴とさせるものがある。『マビノギオン』の物語の中でも、「第一話」で、恋するプイス（Pwyll）の結婚の意志を確かめにやってくるリアンノン（Rhiannon）をはじめとして、自立して、逞しく生きてゆく女性たちの登場が見られる。このリアンノンは、「第二話」では夫プイスの死後、彼の領地ダヴェドの地を取得して、マナウェダン（Manawydan）と再婚する。942年にウェールズを統一したヘウエル・ザー（Hywel Dda）は、戦いではなく、話し合いによって、周囲のイングランド人と共存する道を求め、ウェールズの社会に以後300年にわたっての平和をもたらした。「良き」（'dda'）統率者として知られた人物であった。自分の名を刻印したコインを鑄造し、930年、ウィトランドで、ブリテン最初の長老の集りとされる集会を開いて、ウェールズ全土に共通の法律を制定し、その後この「ヘウエルの法」（'Cyfraith Hywel'）が施行されてゆくのである。最初は口頭で伝えられていたこの法律は、13世紀頃、ラテン語とウェールズ語の文字で書きとめられ、以後、1536年の「併合法」（'Act of Union'）によって、ウェールズにイングランド法が適用されるようになるまで、社会の基本法となって生きつづけた。「ヘウエルの法」は散文の基本を作ったウェールズ語の貴重な文献であったのみならず、この法律の中で決められた女性の権利の大きさは、他に例を見ないものである。大きな特徴の幾つかを挙げると、そこには法のもとの男女平等の考えが貫かれており、結婚は女性の側の承認なしには成立せず、それは宗教的な結びつきではなくて、あくまでも契約として機能していた。7年の結婚生活の後には、女性からの要請で離婚が成立し、その際女性は夫の財産の半分を請求することができた。子どもたちの身分も、嫡出子・非嫡出子の区別

なく保証されており、親の財産は、すべての子どもたちに平等に分け与えられることになっている。家庭内では故のない暴力をふるうことは許されず、物語の中にもよく登場する如く、夫が妻を三回にわたって理由なく打ったようなときは、妻は当然の権利として、離婚を要求することができた。殺人等の犯罪の処理の仕方にも独特なものがある。罪を犯した者の家族は、被害者に損害賠償をするといった方法で咎を償うことが求められたのである。処罰や報復をもって償いをするという他国のやり方と比べると、このような措置は、画期的なものと言うことができる。また公開処刑や拷問といったことは厳しく禁じられ、中世の悪名高い魔女裁判のようなものは、ウェールズ社会では存在しなかった。農業は社会全体でおこなう共同の作業と見なされていた。この共同体の思想は、800年後のロバート・オウエン（Robert Owen, 1771-1858）の思想を先取りする考え方であった。

以上のようなことから明らかなように、ウェールズの社会においては、女性たちは男性と同じような権利と力をもって、生き生きと活躍している。その背景には、そんな女性の活動を認める男性たちの理解と支援があった。

スノーヴェル夫人とゲスト（後のシュライパー）夫人、19世紀に活躍した二人の貴婦人たちもまた、まさにそんなウェールズ社会の伝統が生んだ人物であったのである。

注

- 1) 以下のスノーヴェル夫妻の活動については、主として Monmouthshire Local History Council 発行の Journal, 'Presenting Monmouthshire', vol. 8 (Autumn, 1959) から vol. 16 (Autumn, 1963) の、Maxwell Fraser の記述を参考にした。
- 2) Giraldus Cambrensis, *The Journey Through Wales*, Penguin, 1978, p. 236.
- 3) Bobby Freeman, *The First Principles of Good Cookery*, Brefi Press, 1991, 'Introduction', p. 23.
- 4) 吉賀憲夫氏の、『旅人のウェールズ』（晃学出版, 2004）, II 3. アイステツツヴォッド（pp. 184-217）を参照させていただいた。
- 5) シャーロット・ゲスト夫人関係の記述は、中野節子、「あるヴィクトリア婦人の肖像(1) & (2)」(「大妻女子大学文学部 30 周年記念論集」(1997) & 「大妻女子大学紀要 — 文系 — 第 30 号」(1998)) 参照のこと。

参考文献

- Bartrum, Peter (ed.), *A Welsh Classical Dictionary*, Cardiff, 1993.
- Brevertton, Terry, *100 Great Welshmen*, Porth Glyndwr, Glyndwr Publishing, 2001.
- , *100 Great Welsh Women*, Porth Glyndwr, Glyndwr Publishing, 2001.
- Etheridge, Ken, *Welsh Costume*, Swansea, Christopher Davies, 1977.
- Fraser, Maxwell, 'Sir Benjamin Hall (Afterward Lord Llanover)', *Presenting Monmouthshire*, 1959, vol. 8, pp. 7-10.
- , 'Benjamin Hall (Afterwards Lord Llanover) and the Monmouthshire Borough', *Presenting Monmouthshire*, 1961, vol. 12, pp. 8-20.
- , 'The Prince of Orange visits Llanover', *Presenting Monmouthshire*, 1962, vol. 13, pp. 39-45.
- , 'Christmas at Llanover', *Presenting Monmouthshire*, 1962, vol. 14, pp. 25-9.
- , 'Child Prodigies at Llanover', *Presenting Monmouthshire*, 1963, vol. 16, pp. 30-5.
- Freeman, Bobby, (the facsimil edition), *The First Principle of Good Cookery by The Right Hon. Lady Llanover*, New Port, Brefi Press, 1991.

Lady Llanover (ed.), *The Autobiography and Correspondence of Mary Granville, Mrs. Delaney*, 3 vols, London, Richard Bentley, 1861.

—————, *The First Principles of Good Cookery*, London, Richard Bentley, 1867.

Ley, Rachel, *Arglwyddes Llanover, Gwenynen Gwent*, Caernarfon, Wasg Gwynedd, 2001.

Stephens, Meic, (ed.), *The New Companion to the Literature of Wales*, Cardiff, University of Wales, 1998.

Williams, Maria, Jane, (collected and arranged), *Ancient National Airs of Gwent and Morganwg*, Llandovery, 1844. A Facsimile of 1844 edition, with Introduction and Notes by Daniel Huws, The Welsh Folk Song Society, 1994.

吉賀憲夫, 『旅人のウェールズ』, 晃学出版, 2004.